

Bibliography of Medical Reviews に載った
日本のレビュー文献
Japanese Review Articles Indexed in
Bibliography of Medical Reviews

津 田 良 成
Yoshinari Tsuda

Résumé

Unlike indexes and abstracts, review literature has not been a popular topic for research. And most of these studies have been either on its definition and classification or on its searching tools and lists. Few studies made by Japanese were mostly in medical and pharmaceutical fields.

Many of the studies describe the *Bibliography of Medical Reviews* (BMR) as an excellent searching tool for them in the field of medicine.

Woodward examined and counted the review articles published in 1972 in the fields of science and technology by using *Science Citation Index*, and he suggested a method of determining them by counting reference given in articles. He suggests that 40 references would be practical level of determining that an article should be a review.

To find the coverage of Japanese medical review articles by the BMR, its 1974 and 1975 volumes were examined, and all articles written by authors with Japanese names were searched. Seven hundred and fifty one articles were found, of which 141 were from journals published outside of Japan, including 63 with co-authors of non-Japanese names and 25 with two or more of Japanese names. The latter group's articles could be safely assumed to be by Japanese authors, however, the former group's articles could be written by non-Japanese with Japanese names such as nisei doctors.

Among 610 articles from Japanese medical journals, there were 9 of them from English language journals.

The trouble is that these 610 are not representing a major portion of review articles from Japanese medical journals published in these two years covered by the BMR. The BMR indexed 101 Japanese medical journals in 1974 and 103 in 1975, while there are more than 1,400 Japanese journals in the fields of health sciences.

津田良成：慶應義塾大学文学部図書館・情報学科教授
Yoshinari Tsuda, Professor, School of Library and Information Science, Keio University.

Igaku Chuo Zasshi, comprehensive abstracting service in the field in Japan does not provide any means of searching reviews.

These 610 articles were classified by their number of references, and the largest group was with 21-30. The result revealed that Woodward's method can not be successfully applied to those review articles.

- I. レビュー論文
 - A. 定義と分類
 - B. 日本の科学者のレビュー論文に対する要求
- II. 医学およびその関連分野におけるレビュー論文
 - A. レビュー論文に関する調査・研究
 - B. 医学分野におけるレビュー論文とレビュー専門誌
- III. *Bibliography of Medical Reviews* に収録された日本人のレビュー論文
 - A. レビュー論文の選択基準
 - B. 日本の医学レビュー論文の調査
- IV. 結 論

I. レビュー論文

A. 定義と分類

1959年にワシントンで開かれた科学技術情報の国際会議の第3部門で、2つのレビュー文献についての論文が発表された。後のパネル討論で、パネル・メンバーの一致した意見として、質の良いレビュー論文がより多く出てくることに対する要求が益々増えている反面、そのようなレビュー論文を書くことの出来る人を見つけることが非常にむずかしいということと、批評的レビュー論文というものが減ってきているが、このレビュー文献というものは、研究成果を伝えるという機能において益々より大きな部分を占めるようになってきていると述べている。¹⁾

又、今日の自然科学分野の情報活動の発達に大きな貢献をなした有名な Weinberg 報告書²⁾の第3部、「科学技術界への勧告」の中にも「学術界はレビュー論文の著者達により高い地位を与えるべきである」という勧告があり、学術的なレビュー論文や批評をとまなう書誌というものが、直面している情報氾濫の危期をやわらげるのに重要な役割りを果していることを指摘し、レビュー論文を書くということは、研究の結果明らかにされた膨大

な情報というものを、作り直し、批判的に分析し、合成し、明らかにすることが出来るような人の努力にふさわしい仕事であるとし、科学技術分野の関係者達が、レビュー論文を書く人達に物心両面から報いなければならないことを強調している。

その後 Weinberg 報告書中の勧告の多くは、実際に実行に移されたり、その線に沿っての実現に努力が払われたりしている。しかし、レビュー論文に対しての勧告は、研究報告書類についてのレビューの出現を求めたものも含めて、未だに十分に実現されたとは言いがたい。

Scott Adams³⁾は、1961年に出版された *The Bibliography of Medical Reviews* の6年分の累積版の冒頭で、自然科学分野の出版物形式として、批評的レビュー論文 (critical review) というものは、多大な人気と種類の多さを誇って居り、その必要が、科学にとってより重要なものとなってきていることを述べ、新しく証明された知識を、それまでに既に確立されている古い知識に総合して1つのものとする伝統的な科学の道具として、18世紀には専門分化した教科書の発達が見られ、19世紀は百科事典的な *Handbücher* の時代であったように、20世紀はレビュー論文の時代であると論じた。そして、1955年に出版された *Bibliography of Medical Reviews*

の第1巻から、1960年の第6巻までの各巻に収録されたレビュー論文の数がそれぞれ、1,075, 2,000, 2,885, 3,241, 2,382, 3,300であったことを示めし、年々個々の増減はあるけれど、全体的に見て年間に生産されるレビュー論文の数は増えていると述べている。

しかしながら、L. Papier⁴⁾ や A. M. Woodward⁵⁾ 達がレビュー文献についての論文で強調しているように、索引や抄録などの技術、仕組、役割、有要性等については何千という調査も行なわれ、その結果が論文として発表されているが、レビュー文献の性格や、レビューの書き方などに関する論文は1971年のPapierの調査の段階でも40に達しておらず、その後の論文を数えても、せいぜい50になるかならずといった有様である。

世界の科学技術分野の文献は相変らず急速に増加しているが、Papierも述べている通り、最近ではコンピューターにより、これら大量の文献も比較的短時間に網羅的に探がせるようになった。しかしそれらの文献が仮りにすべて問題なく入手できたとしても、その文献を読み、その中から必要な情報を見つけたし、理解し、使用できる形に変形しない限りは、それらの文献も本当に役に立つわけではない。ところが個人、個人には時間的制限と能力に限界がある。即ち、これらの文献が有用であるためには、人が消化できる形と量のものにしなければならぬ。そこで、これらの文献に含まれている情報を濃縮し、分析し、解釈し、合成し、評価するという機能を持つレビュー論文の重要性が文献量の増大と歩調を合わせて大きくなっていくわけである。それにもかかわらず、科学技術の情報活動に従事するものへの関心が、今後の文献情報活動の中で、中心的な役割の1つを果すこのレビュー論文に向けられていないというのはどういふことを意味するのであろう。

Papierの定義⁶⁾をそのまま借りると、レビュー論文とは、“数多くの印刷物形式の情報源から見つけ出した1つのトピックに関する情報を、記述的に表現するか、又は(より判り易い形に)変形したもの”となる。彼は更に批評的レビュー論文 critical review というものを定義して“ある主題分野全体又は、その内の一分野を調査し、分析し、その進歩を評価し、導き出された結果を統合し、その分野の取るべき方向を示めすもの”としている。

ここで普通のレビュー論文に対して批評的レビュー論文という言葉が出てきた。Weinbergの報告書でも、S. Adamsの論文でも、その他大部分のレビューに関する

研究論文が、レビュー論文の中で特に批評的レビュー論文というものの重要性を強調している。

Henderson⁷⁾も述べている通り、批評的レビュー論文というものは技術論文の形としては決して新しい種類のものではなく、昔から技術雑誌には、その時その時のカレントの論文や出版物を評価する記事やレビュー論文が載せられていた。しかし、今ではその必要が増大したために、レビュー論文のみを載せている数多くの専門誌が存在する。

1968年に *Journal of Chemical Documentation* が化学分野の批評的レビュー論文に関する特集を行ない、C. Herring⁹⁾, E. Bering⁹⁾, L. B. Townsend¹⁰⁾, H. Hart¹¹⁾ がそれぞれ、利用者の立場、その出版を企画し、資金を出す機関の立場、レビュー論文の著者の立場、編集者の立場などからこの問題に対して種々の検討を加えている。その中で化学分野の代表的レビュー誌である *Chemical Reviews* の編集をしている Hart は、すべての化学者が批評的レビューを必要だとしており、多分ほとんどの人が、どれが単なる文献の紹介である書誌的レビュー論文であり、どれが批評的レビュー論文であるかを見分けることができるであろうと述べている。そして、勿論、単に文献の紹介をしているレビュー論文より、それらの文献を消化して批評的にまとめるほうがむずかしい仕事であり、多くのレビュー論文はその両極端の中間に分類される種類のものであるとしている。又、彼は毎日のように発表されている科学文献のすべてが科学の進歩に役立つものではなく、単に発表者の業績を増やすために発表されている論文も少なくないことを指摘し、読まなければならない膨大な文献の山に直面している研究者達の努力を軽減するために、批評的レビュー論文というものは、意味のある文献をレビューして、特定分野の研究成果の現状を展望するばかりでなく、望ましくは問題点を指し示めし、その分野の進展する方向についても示唆を与えることの出来るものでなければならないものとしている。

現実には、いろいろな種類のレビュー論文がいろいろな角度から書かれており、これを1つの尺度で分類するのは大変むずかしい。

例えば前述の Papier¹²⁾ はレビュー論文を、

- ① 書くのに必要な対象主題に関する知的努力の度合
- ② 性格
- ③ 構成因子と内容

の3つの異った尺度から分類を試みている。そして①の

知的内容の面では評価的、分析的、解釈的、書誌的、批評的、創造的の6項目に分け、②の性格による分類では、網羅的、周期的、権威的、一般向け、特定主題中心の5項目を設け、③の構成因子と内容による分類では、カレントなもの、相当選択的なレビュー論文、データのレビュー、概念のレビュー、方法のレビュー、学際的分野のレビューなど6つの項目をあげている。

その他、利用者の使用目的には

- ① 自分の専門分野であるが十分に精通していない面を理解したり、新しい分野や関連分野についてのオリエンテーションを必要とする場合に教科書的な機能で使用するため。
- ② 最近の重要な文献を見逃さないで、自分の分野の進歩についてゆくためのカレントの書誌として使用するため。
- ③ 特定の事柄やデータについての情報を得るためのレファレンスに使用するため。
- ④ 新しいアイデアや創造性の源泉として、の4つがあるとしている。そして Cuadra の *Annual Review of Information Science and Technology* の利用目的の調査¹³⁾を紹介して、①をあげた人が22%、②をあげた人が83%、③をあげた人が24%、④をあげた人が14%居たことを報告している。

Woodward¹⁴⁾は科学技術分野のレビュー文献というもの、カレントの文献に報告されている研究成果の動きについてゆき、重要な文献を検索し、知識の発展を評価し統合するのに役立つとしている。そして、これらのレビュー論文をAからGまでの7つのカテゴリーに分類し、Aは更に批評的、評価的、解釈的、思索的の4種のレビュー論文に分類し、Bは現状展望のレビューであるとし、Cは歴史的、と書誌的の2つに分け、Dは教育的(又は教科書的)とし、Eも技術的と応用的の2つに分け、Fも一般向けとトピック的に分け、Gは図書の書評やコメントの類とした。

以上のことから明らかなように、レビュー論文そのものは多種多様であり、両極端の特定分野の文献を単に紹介しているものと、文献内容を分析し、評価し、統合する批評的なレビュー論文の他は人によりその分類もまちまちであることがわかる。

なおレビュー論文の情報源としては、Woodward¹⁵⁾は、①レビュー専門誌、②原著雑誌、③学会発表論文集(原著雑誌に載せられているのも含む)、④図書類、⑤研究報告書類、⑥二次資料(抄録誌などの一部としてレ

ビュー論文を載せているものなど)の6つをあげている。又、更にレビュー専門誌を、(a)特定主題における研究成果の現状展望 state-of-the-art のレビュー論文を載せて年刊で出版される annual review タイプ、(b)批評的レビューと現状展望的レビューの両者を含み不定期で出される advances タイプ、(c)屢々批評的レビューを含み、学会などから季刊や月刊などの形で出される、例えば *Chemical Reviews* のような雑誌タイプ、(d)比較的広い分野を対象とし、問題となっている特定の主題について非専門家向けのレビュー記事を提供する例えば *Scientific American* のようなタイプ、(e)医学分野にある、現状展望の一種ではあるが、個々の論文を対象として取扱っている yearbook タイプ、(f)特定分野における長い論文形式の不定期に出される *Fortschritte der Physikalische Chemie* のような monograph シリーズのタイプ、(g)教科書的なレビューで、教師などを含めた専門家より広い範囲の利用層を狙っているエッセイタイプ、(h)通常1つの主題に関して、その分野の最近文献の幾つかを選んで、これを核として書かれる短いレビューの comments タイプの8つに細分している。この分け方はレビューの形態別分類としては十分に納得のゆくものと言えよう。

B. 日本の科学者のレビュー論文に対する要求

User study という種類の調査・研究が盛んになり出してから、研究者の情報要求の活動の中で情報源の1つとして、レビュー論文がどの程度に必要とされ、利用されているかということは屢々論じられているが、レビュー論文そのものの調査としては、全く断片的なものが多い。しかし Brunning¹⁶⁾は、1958年に Washington で開かれた科学技術情報に関する国際会議で、英国における150人の化学者達に質問票を送って調査したレビュー論文の利用状況や、これに対する希望についての報告を行なっている。そしてその結果以下のような事柄が明らかになった。

- ① (英国の)化学者の大部分は自分の専門分野またはその関連分野のレビュー論文に眼を通してはいるが、一般的な広い科学分野のレビューは余り読んでいない。
- ② 一般的には(化学分野に於いては)十分なレビュー論文が出されていると考えられる。
- ③ Advances in..., Annual Review of...タイプのレビュー専門誌は有用だが、タイム・ラグの大きいのが難点である。また、関係の少い文献のら列であることがある。
- ④ 研究に従事する化学者は、特定の主題について網ら

- 的なレビューに完全な書誌のついているタイプのものを望み、教育に従事する化学者は、より広い分野を対象とした一般的なレビューに選択的な文献のリストのついているものを望んでいる。
- ⑤ 幾人かの化学者は annual review 類が個人で購入するには高すぎると述べ、個々のレビュー論文が購入出来る方法を要求している。
- ⑥ 良いレビュー論文が入手にくい理由の1つは、良いレビューを書ける人達が、書く事に時間をさけないためである。
- ⑦ 同じ著者が同じ主題でレビューを書いており、しかもそれが自分の原著論文のリストみたいなのであることが多く見られる。これはレビュー雑誌の編集者がレビュー記事に対する頁数の割り当を極端に節約したりすることにも原因している。
- ⑧ 企業体に所属する化学者の幾人かは、多くの良いレビュー論文というものが、企業体の出している社内向け又は、なかば公開の出版物に載ることを指摘している。又これら企業体に所属する化学者達は、Annual review of... Advance in... タイプのレビュー誌を余り熱心には使用しない。
- ⑨ 最もよく読まれるレビュー誌は(化学分野では) *Annual Reports on the Progress of Chemistry* と *Quarterly Reviews of the Chemical Society* と *Chemical Reviews* の3誌である。
- ⑩ 良いレビュー論文としての条件とは、
- 著者が(対象主題分野での)勝れた専門家であること
 - 批評的な態度で書かれていること
 - 網率的であること
 - 明確な表現でバランスの取れた取扱いをしていること
 - よい文献リストがつけられていること
 - 図・表も必要に応じて示めされていること
- ⑪ 大体において、悪いレビュー論文も沢山存在するけれど、多くのものが良いレビュー論文としての条件を満たしている。
- ⑫ レビュー論文に対する批評としては、著者が、自分の書くレビュー論文が批評的なものなのか、又は単に1つの主題の最近の進歩をまとめたものなのか、書く対象は専門家なのか、関連分野で働く人なのか、専門外の一般人なのかということ、をはっきり決めて書くべきであるということ。
- ⑬ 特許文献のレビュー論文も沢山存在するけれど、多くのものが良いレビュー論文としての条件を満たしている。
- ⑭ 大多数の回答者が、レビュー論文はレビュー専門誌にのみ掲載されるべきだとして、専門雑誌に、原著論文と同居させるのに反対な意見を持つ(但し *Nature*, *Science* タイプの雑誌は別)しかし一部の化学者は特定の主題を対象とした雑誌に、原著論文とレビュー論文と一緒に載っている方が良いとしている。折合いとしては、これらの雑誌に載るレビュー論文はレビュー欄を決めて、そこに載せることができる。
- ⑮ シンポジウムの報告書は有効な情報源だが、実際にはその多くは短かすぎたり、他の論文と重複したりして、余り役に立たない。最大の欠点は出版が屢々1年以上遅れること。
- ⑯ 企業体の化学者は、大学の報告より、研究機関の報告のほうが役に立つと述べているが、そのうちの多くのものが、その入手のむずかしさを指摘。
- ⑰ ほとんどの人達が、*Bibliography of Chemical Reviews* (アメリカ化学会が1955年から1962年にかけて出版した *Chemical Abstracts* に載せられたレビュー論文の索引誌)は有益な出版物であると期待している。何故ならば、医学分野の *Bibliography of Medical Reviews* が役に立つており、同じことが化学でも考えられるから。
- 以上の調査結果からも判るとおり、図書館学や情報科学の専門家達のレビュー論文に対する関心が病的に少ないのはうらはらに、又本当に書いて欲しい主題の専門家達が余りレビュー論文を書かないという一般的な批判にもかかわらず、研究者というものが、盛んにレビュー論文を利用していることが判る。
- 1974年に文部省の特別研究費で、「広域大量情報の高次処理」について研究しているグループの中の「学術文献情報およびデータ情報の流通システム」を研究しているサブ・グループの小谷班が、学術情報活動に直接関係している自然科学系大学教員の実態調査を行なった。¹⁷⁾ 国公私の大学教授に照会して、抄録や索引などの作成、数値データの収集、データ集の作成などの学術情報活動に直接関与している643名の研究者を見出し、これらの人にアンケートを送り、どんな活動を、何時から、どう理由で行っており、その仕事のために主として使用する情報源は何かといったことを調査した。結果288人(45%)から回答があったが、これらの活動で使用され

た情報源としては、学術雑誌論文、大学紀要類の論文、学会講演の予稿、レタージャーナルの論文、プレプリントなどと共にレビュー・総合報告類が盛んに使用されていることが判明した。即ち、その使用率は全情報源中で地質学、鉱物学の分野での 4% を除き、他のすべての分野では 10% 以上あり、物理学では 19%、化学工学、工業化学の分野では 17% もの高率を示めし、生物学・農学の分野でも 12% を占めていた。これは 1 位の学術雑誌論文、2 位の大学紀要類の論文に次ぐもので、索引や抄録、データ集などの作成の情報源としてもレビュー類が有用であることが明白にされた。

なおこの小谷班のグループは、1975年には、大学における研究者の学術情報利用および、学術情報システムの利用の実態調査を行ない、二次情報、総説・レビュー類の利用などを細かく調査した。¹⁸⁾ この調査では国公立の大学に所属する自然科学系研究者の中から専任講師以上の地位にあるもの 1,500 名を無作為に抽出し、研究者個人と、その研究室の助手又は大学院学生 1 名とを対象として、論文（一次情報）を見出す手段、印刷・公表された論文表題集、索引類および抄録集の利用等 8 項目に関するアンケート調査を行った。その中に印刷・公表された総説、レビュー類の利用が 1 項目として取上げられた。

このレビュー類に関する調査内容は、a. 利用の有無と程度、b. 利用目的、c. 利用後の研究行動などであった。その結果、1,054 の学部、62 の付置研究施設、115 の研究所、9 つのその他の機関に所属する専任講師以上の研究者 693 名 (46.2%) と助手および大学院生 547 名 (36.47%) から回答があった。

① 利用の有無と程度および利用分野に関しては、

- a. 「直接研究分野に関するもの」は、利用しないと回答したもの 110 名 (9%)、時々利用すると回答したもの 751 名 (61%)、よく利用する (月 1 回以上) と回答したもの 362 名 (30%)。
- b. 「自分の専門内ではあるが直接研究に関係のない分野のもの」は、利用しないと答えたもの 150 名 (13%)、時々利用すると答えたもの 143 名 (12%)。
- c. 「専門外の分野」を対象とする総説・レビュー類は、利用しないと答えたもの 641 名 (57%)、時々利用すると答えたもの 451 名 (40%)、よく利用すると答えたもの 37 名 (3%)。

という結果が出た。即ち、直接研究に関係ある分野のレビュー類は、90% 以上の研究者がこれを利用しており、

しかも利用者の 1/3 は月 1 回以上も利用していると答えている。又、直接研究に関係のない分野でも、専門内の分野であれば、やはり 90% に近い研究者がレビュー類を利用しているが、その大部分は時々利用するに過ぎない。そして、専門外の分野のレビュー類になると、半数以上は全く利用していないが、それでも 3% の者は月 1 回以上利用すると答えている。

② 利用目的としては、

- a. 「ある課題についての up-to-date な知識を得るため」が 25%
- b. 「(その分野の) 進歩の概況を知るため」が 22%
- c. 「ある題目に関する原著論文を探すため」が同じく 22%
- d. 「知識を整理し、理解を深めるため」が 19%
- e. 「興味があるので」が 5%
- f. 「執筆者の見方を知り、あるいは学ぶため」が 4%
- g. 「あなた、またはあなたのグループの研究がどう取扱われているかを知るため」が 2%
- h. 「その他」が 0%

という結果になった。

即ち、(a)up-to-date の知識を得たり、(b)進歩の概況を掴んだりするために、自分の専門分野のレビュー類に眼を通すという場合が非常に多く、この結果は前述の Papier の調査結果及び Cuadra の報告の「最近の重要な文献を見逃さないで、自分の分野の進歩についてゆくためのカレントの書誌として利用する。」を利用目的としてあげた人が 83% でトップであったというのと一致する。その他(c)のある題目に関する原著を探すためと(d)の知識を整理し、理解を深めるため、までは本当の意味での一般的利用目的と言えるが、(e)から以下は特殊なケースと言うことが出来よう。1 つ注意すべき点は他の利用目的の調査と比較する場合の表現の違いから、必ずしも同じ範囲のことを意味しているのかどうか明確に出来ない点である。今後このような調査を行なう場合に、既存の調査を十分に参考にする必要がある。

③ レビュー類を使用した次のステップとしては、

- a. 「直接引用された一次文献を見る」が 48%
- b. 「レビュー・総説類を見て一応完結する」が 35%
- c. 「引用されている他の総説・レビュー類を見る」が 8%
- d. 「引用されている論文の抄録を見る」が 7%
- e. 「その他」が 1%

という回答があった。即ち 60% 以上の人達がレビュー

論文の中で見つけた文献を読もうとするが、そのレビュー論文が直接自分の研究に関係のない、関連分野の主題を扱っている場合には、抄録で代用して、原著論文は読まない場合もある。又、35%もの人達はレビュー論文を読んで目的は達したとしているのも注目すべき事柄である。

- ④ 総説・レビュー類についての意見としては、
- a. 「世界的に良い総説・レビュー類を見出し利用するための方法を講じる必要がある」は賛成 74%，反対 8%，不明 18%
 - b. 「総説・レビュー類には、執筆者の主観がかなり入ったものも有用であるが、その場合それに反対の意見も出さうような配慮が必要である。」では賛成 62%，反対 14%，不明 25%
 - c. 「自分の研究分野では、良い総説・レビュー類の刊行は抄録等の整備よりも大切である」では賛成 61%，反対 16%，不明 23%
 - d. 「自分の研究分野では、良い総説・レビュー類は不足しており、研究者の負担が若干増しても学会としてはそれを作ることにもっと力を入れてよい」では賛成 51%，反対 25%，不明 24%
 - e. 「総説・レビュー類には、対象とする利用者の層のとり方等により、いろいろの性格のものがある。それを類別して取扱うことがまず必要である」では賛成 43%，反対 19%，不明 37%

という結果であった。ここでの意見は当然のことながら設問に大きく左右されている。(a)の賛成が多いのは順当のことながら、ここで反対としている人の存在することは理解に苦しむ。(c)に賛成する人が61%も居ることは注目に値する。全部の調査結果からも明らかのように多くの人がレビュー論文を盛んに利用しているが、それでも(d)の賛成は50%を越えているのも興味のある点である。また(e)の結果は、総説・レビュー類に関する研究がほとんど行なわれていないため、一般研究者には、意識してレビュー論文の目的や種類をグループ分けして考えることが余りないことを示めしていると思われる。従ってここでの不明の37%は他のどの項目の不明よりも高率になっている。

要するに研究者の総説・レビュー類の利用率は非常に高く、それも自分の専門外の分野のものでなく、自分に直接関係する分野のものをよく利用しており、その使用目的の半分近くが、up-to-dateの知識を得たり、進歩の概況を掴んだりするためで、それに「(自分の分野の)

ある題目に関する原著・論文を探すため」を加えるとそれで70%を越えることになる。そしてこれらのレビュー論文を読んだ結果、半数以上の人達がそのレビューで紹介されている文献などを探して、更にくわしい情報を得ている。

II. 医学およびその関連分野における レビュー論文

A. レビュー論文に関する調査・研究

前述の Scott Adams¹⁹⁾が述べているとおり、レビュー論文は、新しく報告された情報を統合し、その対象研究分野の累積された知識に関係づける最初のステップである。彼は、レビュー論文を学問分野別とカテゴリー別の2つの基本的なタイプに分け、両者共に19世紀のドイツの原型に由来すると説明している。即ち、学問分野別のレビュー誌は、1つの研究分野で年間に投稿されたものを網羅的に記述し記録することを意図した *Jahresbericht* から起き、その分野は組織的に細分化され、その分野の個々の専門主題は個々の論文によってカバーされる。そしてこの *Jahresbericht* は批評的レビューでも評価的レビューでもなく、その分野に属する投稿論文を1年毎に、組織的に、継続的に記録することを目的とするものであると述べている。

カテゴリー別のレビュー誌は、特定の問題の解決に焦点を当て、幾つもの学問分野にまたがる論文類を扱う出版物である *Ergebnis* から生れたものであるとしている。このカテゴリー別のレビュー誌は高度に選択的で、主題関連文献の扱いは批評的であり、発見的で、研究成果の記録のためばかりでなく、考察も提供するとしている。

また利用の対象及び目的からも分類して、研究レベルでは、*Advances* シリーズに載せられるレビュー論文のように、特定分野の研究の進歩を咀嚼し、統合し、科学者間のコミュニケーションに役立つものがあり、臨床のレベルでは *yearbooks* シリーズのように、医療の実際に応用し得るような新しい情報を選択し、研究者と臨床医との間を結びつける役をするものがあり、科学者が自分の専門以外の分野のレビューを読む場合も含めた、一般読書のレベルでは、*Scientific Monthly* タイプのレビュー論文が、科学の進歩を一般の人に判って貰うということを狙っているとした。

これらの分類は、多くのレビュー文献の研究者達によって引用されたり、参考にされたりしている程典型的な

もので、Isabella Leitch²⁰⁾も基本的な2つのレビュー論文の原型については同意し、*Physiological Reviews*に屢々カテゴリー別レビューの良いものが載っているとしているが、彼女は更に第3の型として、分析的で建設的な研究レビュー論文というグループを考えた。但しこれはカテゴリー別タイプの延長みtainなものである。彼女はこのグループのレビュー類を事実と研究成果に直接関係するもので、対象となった文献の著者の意見にはほとんど無関係なものとしている。しかしそれらの文献の中に表われた概念を対象とするレビューもこの類であり、しかもこの種のレビュー論文は、すべてのレビューの中でも最も進歩した形のものであるとしている。彼女は *Nutrition Abstracts and Reviews* を例にとり、栄養学のような分野は、広い異った学問分野に散らばっている関連雑誌に載った論文を対象にする分野で、対象文献の収集が困難であるが、それだけに集めて分析する必要が強いことを指摘している。この抄録とレビューを載せている所謂二次資料タイプのレビュー誌は、1931年に発行した当座は約20ヶ国語にわたる400種の雑誌から年間3,000を越える論文の書誌的データや抄録などを収録していたが、1950年代末にはすでにこれが600種の雑誌からの6,000論文にふくれあがっていた。

彼女は、この第3のグループの中で、分析的なレビュー類として多くの研究論文の中に含まれた研究結果の事実やデータなどを集めて、新しい1つのものとして、そこから推論した結論をひきだしているものと、数値データなどに焦点を当てたレビュー類、論文中に扱われている概念のみに焦点を当ててこれを収集しているレビュー類の他に、必要な解釈を加えている解説的レビュー類と、1つ以上の分野からのデータを取り上げて、それらの関連性を述べている最も高度な種類に属する創造的レビュー類をあげている。

Virgo²¹⁾は Adams や Leitch の分類を紹介した上で、学問大系別の周期的に出版される第1グループのレビュー類というものが、一般的にはその分野の専門家によって書かれるが、収録文献に含まれている研究結果や意見というものを短く簡単に説明していて、ほとんど批評を交えず、通常は分析も統合も行なっていないとしている。そしてこの種のレビュー類の多くは短い解説のついた書誌に過ぎず、より深く内容を知りたいものを失望させるとしながらも、一方において、それでも収録文献同志の間での位置づけが行なわれているから役に立つとし、

- a. 研究者自身の専門分野又は関連分野の研究の動きについての current awareness に役立つ。
- b. 日々の情報収集活動からはもれてしまう大切な文献に注意を向けてくれる。
- c. 新しい分野の研究に入っていく、その分野の網羅的な文献リストが必要となる時に、その主題分野についての概観を掴ませてくれる。

などの利用面があると述べている。

又、カテゴリー別のレビュー類については、網羅性も対象文献を一定の時期のものに絞ることも必要としておらず、レビューを書く人の批評の裏づけとなる専門分野の知識の程度と正確さがポイントとなることを指摘している。よく書かれているカテゴリー別のレビュー類は、余り価値のない論文を捨てて、意味のある、重要な論文にのみに焦点を当ててくれるので、その主題分野の研究の進歩を知るためのよいガイドとなる。

current awareness の活動でレビュー論文を使用する利点は、索引や抄録や単なる文献リストを使用した場合と異なり、見つけ出された文献に評価が加えられているか、そうでない時でも、少くとも他の文献との関連づけおよびその分野の累積された知識との関連づけがなされている点である。勿論その一方において濃縮作業という、より手のこんだ作業が加えられているため、他の二次資料類より、更に作成に時間的な遅れが起り易いという欠点もある。

レビュー文献はその他に新しい研究方向を示唆したり、新しいアイディアの情報源となったりするので browsing といったような使われ方もされるし、特定情報を求めるためのレファレンスにも使用される。

レビュー文献についての日本の論文は、甚だ数が少ないが、その大部分は医学・薬学分野のものである。1970年に関口²²⁾が、レビュー誌の意義と重要性について、その歴史、目的、対象、一次文献との関係、カバーする期間、刊行の頻度と形式、執筆者の資格などについての概観的な紹介を行い、その中で、図書館サービスを情報化時代の要求に応じうるようにするためにも、図書館員は、索引や抄録に対する関心に劣らぬものをこのレビュー誌類に向けるべきだと述べている。

1971年に金尾²³⁾は薬理学の領域の *Annual Review of Pharmacology* の各巻に掲載されている “Review of Reviews” を三次資料として取り上げ、レビュー論文に対する懇切な手引き・解説書の必要性を強調している。同年に花田²⁴⁾は基礎化学分野のレビュー専門誌の紹介

を行っている。又、1973年には笹川²⁵⁾が国外、国内の多くの文献を参照しながら、薬学・医学分野のレビュー論文の探索のために役立つ *Bibliography of Medical Reviews* や *Bibliography of Reviews in Chemistry, Biological Abstracts, Chemical Abstracts* 等の二次資料類や *Chemical Reviews* など幾つかのレビュー専門誌の他に、レビュー論文がよく掲載されている主要な雑誌類を紹介している。その中で彼は日本の二次資料類にふれて、それらがレビュー論文の検索に役立つ十分な手段を講じていないため、わが国におけるレビュー論文の検索は困難をきわめており、レビュー論文に対する自家製の索引を作っておかなければならないということを指摘している。最近では東京大学医学図書館の青木らのグループ²⁶⁾が、医学分野の総説・レビュー論文及び、これを探索するために使用される二次資料類の紹介を行っている。笹川の調査との違いは、前者が *Bibliography of Medical Reviews* と、1974年から新たに出版された *Index to Scientific Reviews* の2つの索引誌のみに焦点を当ててこれらを丁寧に紹介していることと、医学及びその関連分野の主要なレビュー専門誌346誌を主題別に分類してあげているのに対し、後者は *Chemical Abstracts* や *Biological Abstracts* など他の主要な検索ツールを広く説明している点である。

B. 医学分野におけるレビュー論文とレビュー専門誌

前述の Woodward²⁷⁾ は1972年に出版された自然科学分野のレビュー論文数を調査し、レビュー専門誌の数が309誌あり、それに収録された論文数は3,675であり、実際にはこれが多分総数の80%ほどであろうと推測して、このタイプの出版物に発表されたこの年のレビュー論文数を4,500であろうと報告している。

原著雑誌類に載せられたレビュー論文数の雑誌に載せられた総論文数に対する比は種々の調査により異り、0.7%から6%という率が示めされているが、Woodwardの調査では大体1.1%であろうとしている。彼はISIの *Science Citation Index* の“Source Index”に

約4,000のレビュー論文が収録されていることから、1972年に原著雑誌の類に掲載された原著論文の総数を100万と定めて、原著論文に対するレビュー論文の数の比率1.02から1.13%をこれにかけて、この年にこの種の雑誌に掲載されたレビュー論文の総数は10,200から11,300であったとし、10,500という値を決めて計算している。この他に学会の発表文献中のレビュー論文と認められるものが4,000、また教科書などの類でレビュー論文と見られるものが2,500、研究報告書の類では250のすべてを合わせて、この年のレビュー論文の総数は約22,000であると報告している。

一方笹川²⁸⁾は *Chemical Abstracts (CA)* と *Index Medicus (IM)* に採録されたレビュー論文の数の比較を表によって示めている(表1)。

この表の1972年のところで、*Chemical Abstracts* のみでも23,785のレビュー論文を載せているのと、前述の Woodward の推定の自然科学分野全体での22,000論文という数との違いは、前者が収録年での数で、後者が実際にその年に出版されたレビュー論文の数であるという期間の違いを考慮しても違いすぎている。多分これは Woodward のレビュー論文を選ぶ規準が、*Chemical Abstracts* の場合よりきびしかったためと思われる。

なお笹川は *Chemical Abstracts* 収録論文中レビュー論文の占める比率を計算し、1967年から1973年の累計で5.9%としている。そして *Index Medicus* の場合は1966年から1973年の累計で2.6%であったと報告している。

Virgo²⁹⁾は *Bibliography of Medical Reviews* の vol. 1 (1955) から1970年の12月までに収録された全レビュー論文数58,700と、この間に *Current List of Medical Literature* 及びそれに続く *Index Medicus* に収録された医学論文の総数とを比べて、レビュー論文数と非レビュー論文数との比は1:38(約2.63%)であるとしている。

第1表 CA および IM に採録されたレビュー論文の数

	'58	'59	'60	'61	'62	'63	'64	'65	'66	'67	'68	'69	'70	'71	'72	'73
IM	3,241	2,382	3,300	4,800	6,633	3,266	4,510	4,071	4,590	5,273	5,472	5,451	5,177	4,794	6,056	6,310
CA	5,553	6,344	6,370	6,799	8,601	2,000	3,000	3,229	7,328	9,443	11,095	12,171	16,377	16,856	23,785	24,500

注 笹川, 医学図書館 Vol. 18, no. 3 (1973) p. 111 より。

この *Bibliography of Medical Reviews* は 1955 年から出版され、当時の医学分野で最も網的であった索引誌で現在の *Index Medicus* の前身である *Current List of Medical Literature* に収録されている雑誌論文中のレビュー論文のみを収録した索引誌で、1958年の第3巻からは、*Current List* に収録されていないレビュー論文も収録するようになった。1961年の第6巻は1巻から6巻までの累積版として出されたが、1巻から5巻までのレビュー論文の1部が収録されていない点は注意を要する。なおこの累積版は 13,500 のレビュー論文を収録している。1960年に *Current List* が *Index Medicus* によって引き継がれた後もそのまま *Index Medicus* に収録された医学レビュー論文及びそれ以外の医学分野のレビュー論文を収録していたが、1965年の3月からは *Index Medicus* の毎月号に別のセクションとして載せられるようになると同時に *Index Medicus* に収録されない雑誌からのレビュー論文を収録しなくなった。1966年の11巻まで年刊で出版されていたのが、1967年からは *Monthly Index Medicus* にも、本体と別に毎月載るようになり、同時に *Cumulated Index Medicus* の中に累積された *Bibliography of Medical Reviews* として出されるようになった。なお 1966年より 1970年までの累積版も出されている。又、1955年以前のレビュー論文は *Annual Review of Medicine* の第1巻 (1950) から第7巻 (1956) まで続いた *Annotated List of Review in Medicine* を使用すれば検索できるが、このリストは網的でなく、最後の第7巻も 893 のレビュー論文をあげているに過ぎず、又各論文に対しても短い説明がされているだけであるが、それでも1950年代からの医学分野のレビュー文献を探すための手段が備わっているということは、他の多くの学問分野に比べて、文献調整の活動面で一步進んでいると云えよう。問題点は、*Index Medicus* が雑誌論文のみを収録対象にしているため、*Bibliography of Medical Reviews* も雑誌形式の出版物にのったレビュー論文 (annual review, advances の類を含む) のみしか収録しておらず、従って、本の形で出されたレビュー類や、学会の proceedings などに載せられているレビュー類その他が検索できないことである。

医学分野に関係のあるレビュー論文の検索には、当然のことながら、関連主題分野の主要二次資料およびそれらを基としたデータベースが利用できる。例えば、*Chemical Abstracts* と CAS の各種データベース、

Biological Abstracts と *BA Preview*, *Psychological Abstracts* とそのデータベース、さらに *Sociological Abstracts* などの使用も考えられる。しかしこれらの二次資料は、同じ年度のものを使用してもそれぞれ収録しているレビュー論文の出版年に個々の偏差があることを考慮に入れて使用しなければならない。少し古くなったが、Fix⁸⁰⁾ らは、医学・生物学、化学、物理学など8つの学問分野のレビュー論文のそれぞれの分野における主要二次資料での、収録状況、同じ年の二次資料に載ったそれらのレビュー論文の本当の出版年の散らばりなどを1963年の資料を使用して調査した。

医学の分野は *Bibliography of Medical Reviews* 第8巻 1963年が使用され、それに収録された6,633のレビュー論文について、4%のサンプリングによって調査された。その結果、収録論文の出版年の散らばりは、

1962年	2,900 論文	44%
1961年	3,250 論文	49%
1960年	300 論文	5%

となり、半数以上が 1961年以前の論文であったが、そのうち1960年の論文はほんのわずかで、全体として、タイム・ラグが余り大きくないことが判明した。又、1955年から1962年までの範囲では、一般論文に対するレビュー論文の比率が年々高くなり、1955年の0.9%が1962年には4.5%になっていた。但しこの数値は *Bibliography of Medical Reviews* が *Index Medicus* 未収録雑誌からもレビュー論文を収録していた時のであるため、現在の比率はこれよりやや低くなっている。しかしレビュー論文の一般論文に対する比が徐々に高くなってきているのは明らかな事実である。

又、Fix らは 1962年に大体7,000の医学分野のレビュー論文が出版されていると推測している。そしてその42%の2,950が臨床医学分野のものであり、56%の3,900が基礎医学分野のものであったと報告している。この基礎医学分野のレビュー論文中59%の2,300ものが英語以外の言語で書かれていて、71%の2,770が米国以外の国の出版物に載ったものであった。

レビュー論文の載った情報源としては、基礎医学分野のその68%の2,650が原著雑誌に載ったもので、残りの32%の1,250がレビュー専門誌に載ったものであった。これは Woodward が自然科学分野全体を対象として 1972年に出版されたレビュー論文を調査した時の原著雑誌に載ったもの10,500とレビュー専門誌に載ったもの4,500の比70%と30%という結果に非常に近

い値であり、従って、この比は調査年代の違い、分野の違いに関わらずほぼ一定と推測される。また1論文当りの頁数は基礎医学のものでは平均 18 頁と比較的大きい値を示めた。

関連分野としての生物学で *Biological Abstracts* の *BASIC* を使用しての調査結果は次のとおり、

即ち、1963年に収録されたレビュー文献は846、そのうち、1963年の文献は30%で1962年が56%と、1年前までの文献ではほぼ90%となっているが、残りが、1961年から1958年迄にも散らばっている。そして1963年の調査より2年前のレビュー論文の年間収録数に比べるとほぼ2倍になっている程、比較的急速にレビュー論文の数が増えている。また全体の20%が外国語であった。即ち医学分野の *Index Medicus* に比べて *Biological Abstracts* の外国文献の収録率は非常に低い。レビュー論文の載った情報源としては71%が原著雑誌で、7%がレビュー専門誌、残りの21%がその他であった。即ち原著雑誌の占める比率が医学分野に比べて大分高い値を示めていた。又1論文当りの頁数は平均24頁であった。

またこのFixらの調査では、それぞれの分野でのレビュー論文を多く載せている主要な雑誌のリストを附録としてつけており、生物・医学分野では約70の *Advances*, *Annual Review* などを中心とした誌名をリストしている。

レビュー専門誌としてどんなものが出ているかを探すには、Woodward³¹⁾はUNESCOの *List of Annual Review of Progress in Science and Technology* と、Sheffield工科大学の *Library Guide to Literature on Annual Review Series* と、Fixらの *Some Characteristics of the Review Literature in Eight Fields of Science* その他、MARCテープやAslibの *Directory of Review Serials* をあげているが、医学の分野では、やはりBlakeとRoosの *Medical Reference Works 1957-1966* やそのsupplements, Mortonの *Use of Medical Literature* その他の“*Guide to the Literature*”の類が良いと思われる。

III. Bibliography of Medical Reviews

に収録された日本人のレビュー論文

A. レビュー論文の選択基準

Woodward³²⁾は、ある論文がレビュー論文であるのか、ないのかを決定するための客観的規準として、その

重要度順に次の6項目をあげている。

- ① オリジナルな研究の報告ではない。
- ② レビュー文献専門の出版物またはある雑誌のレビュー・セクションに載った文献。
- ③ 論文の題名が“review”という言葉で始まるもの。
- ④ 論文題名又は抄録中に“review”, “progress”, “survey”, “overview”, “advance”などの語が1つ以上使用されている場合。
- ⑤ 論文末に沢山の参考文献をあげている場合。
- ⑥ 二次資料がレビュー論文であるという指示をしている場合。

以上のうちで①だけが必要条件であり、②と③に当る場合にはまずレビュー論文である可能性が非常に高く、④と⑤に当る場合は可能性が強いという程度。そして⑥は1つのデータベースからレビュー論文を探すときのみに当てはまるとしている。

実際にはレビュー論文であるかないか、はっきりしにくい論文というものが沢山存在するし、その判定にも必ずしも客観的にはっきりした規準があるとは言い難い。例えばこのWoodwardが1972年の自然科学分野のレビュー論文の総数を数えるために *Science Citation Index* を使用しているが、その中で‘review’という指示のついている論文で実際に彼の調査の結果レビュー論文として数えることの出来なかったものが相当数あった。この場合の食違いは二次資料作成に当たってのレビュー論文の選別が機械的でありすぎたためか、又はWoodwardの選別規準がきびしすぎたのか、どちらかということになる。

しかし、彼自身は実際にレビュー文献の選別をするために、より簡単な機械的方法として、引用文献を40以上あげている文献をレビュー文献と決める方法を使用することを提案している。実験した結果、40以上の論文を引用文献としてあげている文献のうち、31.95%が本当にレビュー文献であると判定されたが、又、逆にISIがレビュー論文であるとして‘R’の印をつけた文献のうち、引用文献が30以下のものには、実際にはレビュー論文ではないものが多く見られた。即ち、引用文献数が0から5まででは、わずかに12%が本当にレビュー論文であったし、6から10の引用文献数のときは40%、11から25までのときは75%、26から30までのときは90%がレビュー論文とされた。

レビュー専門誌の掲載論文とISIの *Science Citation*

Index で 'R' の印のついている論文とを、その引用文献の数によって分類した表をつくった結果、もし引用文献が 30 以上あるものを機械的に選ぶと、レビュー文献全体のうち 10 から 17% のものが選択からまれてしまうことになる。選択を引用文献数 40 の線で行うと、失われるレビュー文献の数は 15 から 25% ということになる。

ここで前述のように引用文献が 40 以上ある文献のうち、レビュー論文はわずか 35% であったが、これを 30 以上の線まで下げると、さらに多くの文献を調べて、レビュー論文か否かを判別しなければならず、そのうちでレビュー論文とされるものは 15% ほどであるという結果が出た。

以上の結果から彼は、ある論文が確実にレビュー論文であると断定できる条件を次のように定めた。即ち、

- ① 100 以上の引用文献を持っている。
- ② 論文題名中に 'review', 'literature review', 'literature survey', 'overview', 'progress', 'recent' などのキーワードが使用されているとき。
- ③ 論文題名中で他の表現でそれがレビュー論文であると述べているとき。
- ④ レビュー専門誌に載っている論文であるとき。

又、次のような条件があるときはレビュー論文である可能性が大きいとした。

- ① 40 から 100 までの間の数の引用文献を持っている。(この場合、引用文献数が多い程レビュー文献である可能性が大きい)
- ② 索引誌に索引されるときにレビュー論文としての指示がある場合。(例えば ISI での 'R' の印のあるもの)
- ③ 著者が単独著者であるとき。
- ④ 論文題名がレビュー論文であることを示めている場合。(一般には単に主題をのべている)

そして、次のような条件があるときはレビュー論文でないことを意味する。即ち、

- ① 論文題名が実験報告を意味している場合 (例えば 'の研究' という語が使われていたり、シリーズ番号が着いていたりする場合)
- ② レビュー論文を掲載しない雑誌に載っている場合。(例えば *Journal of the American Chemical Society*)

ところで、*Bibliography of Medical Reviews* を編集している米国国立医学図書館 (NLM) の索引部門が使用

している索引要員のためのマニュアルの中では、「索引する論文がレビュー論文であるか否かを判定するのは 'Annual Review' に掲載されているレビュー論文以外はむずかしく、屢々主観的な判別になる」とし、「*Index Medicus* で 'レビュー' とするものは '最近文献のレビュー' 又は 'カレントの文献のレビュー' であるが、若しカレントの文献のレビューが古い文献又は古典文献の例として古い文献も扱っている場合には、除外する理由にはならない」として、判定するための手懸りとして次のような項目を列挙している。即ち、

- ① Review 専門誌の掲載論文はすべてレビュー論文として選ぶ。
- ② 論文の題名に 'review' という語がある時はその論文を載せている雑誌の質と評判を見る。例えば *New England Journal of Medicine* の論文が 'review' という語を使用しているなら疑いもなくレビュー論文。
- ③ 外国雑誌中で 'review' を意味する 'Übersicht', 'Passegna', 'Revue Annuelle' などのセクションに掲載されている論文はレビュー論文。ここでも雑誌の評判を考慮する。
- ④ 若し1つの論文が幾つかの部分に分かれて同じ号に載せられている時はすべての部分がレビュー論文であり得ないことが分る。
- ⑤ 症例のレビューは除く。
- ⑥ 主題の歴史についての論文は除く。
- ⑦ 主として過去 10 年間の文献の分析をレビュー論文として選択。
- ⑧ 特定主題の網羅的レビューとして、雑誌により出版された書誌は選択する。
- ⑨ 沢山引用文献のあるものが必ずしもレビュー論文ではない。引用文献をよく分析して、レビュー論文としての資格があるかどうかを調べる。
- ⑩ 'レビューおよび症例' という表現の題名を持つ論文は選択する。
- ⑪ 種々の雑誌の定まった欄に毎月載せられる summary の類は除く。これらは通常対象期間が短かすぎたり、対象範囲が狭すぎたりする。
- ⑫ ある程度の長さの主題の 'レビュー' を含んでいて、それが実際には論文の残りの部分に対する '文献を十分に引用した' 紹介部分である場合には除く。
- ⑬ 学位論文は除く。

等である。

ここで明らかのように、二次資料がレビュー論文を選別するときの規準は、主題専門家でない何人もの索引係りの間で、選択に食い違いが出てこないように、出来るだけ機械的に選別できるように、細かい、実際の規準を定めているが、主観の入り勝ちな、内容で判断をする必要のある項目は入っていない。しかしそれにもかかわらず、実際に選別する段階になると、どうしてもある程度の主観が入りこんで来る。

その点では、Woodward の提案した 40 以上の引用文献を持つ論文をまず選び出し、その中からレビュー論文を探していく方法は、二次資料のための判別には使用できないかも知れないが、一般的には、非常に実際的で且つ効果的な方法と言えよう。

B. 日本の医学レビュー論文の調査

日本語という特殊性から、日本の医学文献は世界の医学文献の流通機構の中に充分にとけ込んではいない。例えば、日本の医学・医療関連分野の雑誌を網羅的に収録している抄録誌である「医学中央雑誌」は、その 1971 年 9 月 30 日現在の収録誌のリストによると、和文雑誌 1,289 誌、欧文雑誌 134 誌を収録していることになっている。ところが世界の医学雑誌論文の代表的な索引誌である *Index Medicus* は、1974 年で 101 誌、1975 年には 103 誌の日本の医学雑誌を収録対象誌としている。即ち、わが国の医学雑誌に発表される研究成果中、わずかに 8% 弱が、*Index Medicus* により世界の医学研究者に紹介されていることになる。そして、これは論文数にして 7~8,000 程と推測される。従って、*Index Medicus* に収録された論文のうちから前記の規準に従ってレビュー論文であると判定されたものだけを再び収録している *Bibliography of Medical Review (BMR)* では、その範囲の日本のレビュー論文のみが検索し得ることになる。しかし「医学中央雑誌」ではレビュー論文を選別していないことと、この「医学中央雑誌」が外国ではほとんど使用されていないことから、世界に紹介されている日本のレビュー論文という見地から、*BMR* に収録されている日本のレビュー論文の調査を行なった。使用した *BMR* は、1974 年と 1975 年の *Cumulated Index Medicus* に載せられている 2 年分で、その人名索引から日本人の著者、または共著者を持つ論文を抜き出し、その論文を載せていた雑誌名毎に集計を行なった。

日本人の判別は、1 部のイタリー人名、スカンジナビア人名と混同しないように注意をすればそれほど困難

ではなかった。但しこの時、若し日本人名にイニシアルが 2 字あるときは、その著者は米国籍の二世であるか、若しくは長らく米国に居て日本の機関所属の医師とは認められない人達であると考えられるのでこれを除外した。その結果 1974 年の *BMR* からは 402 論文、1975 年の *BMR* からは 349 論文検索された。その中日本の雑誌（英文誌を含む）に掲載されていた論文が、1974 年に 344 論文、1975 年に 266 論文で、2 年分を通しては 751 論文中 610 論文 81.23% あった。外国雑誌に掲載された日本人の著者のレビュー論文を調べてみると、それは次の表のように分類できた。

第 2 表 *Bibliography of Medical Reviews* に掲載された日本人名によるレビュー論文の内訳

		1974	1975	合計	%	
外国雑誌に掲載	外国人との共著	日本人名 1 名	26	35	61	8.12
		日本人名 2 名	1	1	2	0.27
	日本人名 1 名のみ		20	33	53	7.06
	日本人名のみの著者	2 名	7	11	18	2.27
		3 名	1	3	4	0.53
		3 名以上	3	0	3	0.40
合計		58	83	141	18.77	
日掲本雑誌に載	英文誌に掲載		7	2	9	1.20
	和文誌に掲載		337	264	601	80.03
	合計		344	266	610	81.33
総合計		402	349	751	100	

1974 および 1975 年の 2 年間に *BMR* に収録されている外国雑誌に掲載された日本人のレビュー論文は、140 論文で全体の 18.67% に当る。このうち、外国人との共著の日本人名の中には当然日系米人のように外国に帰化している人達も入っている可能性がある。日本人名 1 名の場合も同様であるが、外国人との共著の場合は更にその可能性が大きいものと思われる。外国人と共著でも日本人名が 2 名あるときは、*BMR* が共著者名を 3 名までしかあげていない点を考慮すると、これら日本人の著者が日本人である可能性が大きくなる。まして日本人名どうしの共著の場合には、その可能性が更に高くなり、その人数が多い程確実性を増すものと言えよう。このように日本人の共著者が 2 名以上いる場合を

日本人が外国雑誌に投稿したレビュー論文である可能性が非常に高いものとし、そうでないものを外国籍の日系人である可能性がある程度あるものとして分けると、前者は 27 論文で、日本人の著者によるレビュー論文中 3.6% を占め、後者は 113 論文で 15.07% となる。

日本の雑誌に掲載された 610 のレビュー論文を載せていた雑誌は *BMR* 収録の日本の雑誌 103 誌中 38 誌で、そのうち 1 論文のみ掲載が 13 誌、2 論文のみ掲載が 9 誌であった。レビュー論文を多くのせていた雑誌は次の通り。

ホルモンと臨床	74 論文
麻酔	13 論文
日本臨床	196 論文
生化学	14 論文
臨床病理	20 論文
臨床血液	11 論文
蛋白質・核酸・酵素	170 論文
呼吸と循環	28 論文

この 8 誌で合計 526 論文を占め、610 論文の中約 86% に達している。中でも「日本臨床」と「蛋白質・核酸・酵素」の 2 誌は他誌を大きく引き離し、2 誌のみで 366 論文 60% を占めている。これに「ホルモンと臨床」の 74 論文を加えると 72% に達する。即ち、最初の 2 誌は明らかにレビュー専門誌と言えるし、「ホルモンと臨床」も、レビュー論文が大きな比重を占めている雑誌であると言えよう。

しかしこの「日本臨床」は臨床家のために研究成果を解釈して伝えるタイプのレビュー論文を毎月特定主題を決めて特集号として載せている雑誌であり、この他にも *BMR* に収録されていないが全く同じようなタイプの「治療」であるとか「総合臨床」といった雑誌が存在する。1976年度の「治療」と「日本臨床」を比較してみると、1月には共に「脳卒中」を特集テーマに取りあげているし、「治療」の7月号と、「日本臨床」の5月では共に「膠原病」を取り上げているという程、似かよった編集を行なっている。この事から見ても、残念ながら *BMR* は日本のレビュー論文を網羅的に探すには全く適していない二次資料であることが判る。しかし「医学中央雑誌」その他の日本文献に対する二次資料にはレビュー論文を選別して検索できるような手段を講じているものがないため、手懸りを得るために粗っぽく検索する程度なら *BMR* でも役に立つことがあり得るし、少くとも重要な外国雑誌に載っているレビュー論文が探し得るのは、何

と言ってもその利点であると言えよう。

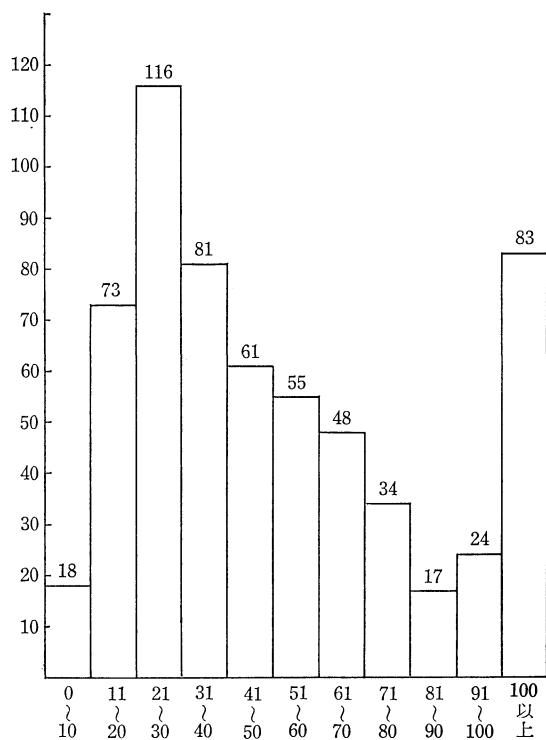
日本人 2 名以上の共著の形で投稿されている外国雑誌に他の日本人の著者による論文が掲載されている場合がある。これは、同じ分野の人が同じ雑誌に投稿する傾向を示めすものと推測される。又、それらに *International Journal of Cancer* であるとか *Molecular and Cellular Biochemistry* などのヨーロッパ系の雑誌が多いのは多分それらの雑誌がより多く外国からの投稿を受ける傾向を持っているからであろう。

BMR に収録された 610 の日本のレビュー論文を、それぞれの論文に引用されている“reference”の数で分けて見ると第 3 表のようになる。

第 3 表 *BMR* により収録された日本のレビュー論文のその引用文献数による分類

引用文献数	レビュー文献数			
	1974	1975	合計	% (累計)
0 — 10	11	7	18	2.95
11 — 20	37	36	73	14.92
21 — 30	70	46	116	33.93
31 — 40	50	31	81	47.21
41 — 50	46	15	61	57.21
51 — 60	30	25	55	66.28
61 — 70	25	23	48	74.10
71 — 80	17	17	34	70.67
81 — 90	8	9	17	82.79
91 — 100	11	13	24	86.39
100 以上	39	44	83	100.0
計	344	266	610	

このレビュー論文数の中には他の自然科学分野のレビュー論文とは大分趣きを異にする臨床家向けの論文が相当数含まれているので、そのままの形では、Woodward 提案のレビュー論文ふるいわけの規準となった、引用文献数 40 の限界線をこの表の数値に当てはめて比べる訳にはゆかないかも知れないが、この表によると引用文献数が 21 から 30 までの層に最大の数のレビュー文献が集まるピークが来るので、40 を越えるもののみを機械的にレビュー論文と決めるという方法を取ると、約半数



第1図 レビュー論文の引用文献数による分類

の47.21%のレビュー論文が失われてしまうことになる。又、30を越えるものというラインを引いた場合でも約34%が失われてしまう。結局 Woodward の調査の場合に近い線に持って行こうとすると、引用文献21以上のものを機械的に取るという方法を取らざるを得なくなる。第1図はこの引用文献数によるレビュー論文の分類をグラフにしたものである。(第1図参照)

この図でも明らかなように、引用文献数が11以上で40以下の文献の総数は270となり、全610論文中の44%にも達している。即ち *BMR* が収録する日本のレビュー文献の半数に近いものがこの範囲の引用文献数を持っていることになり、他の分野のレビュー論文よりか幾分少い傾向を示めている。しかし一方では「生化学」に載ったレビュー論文の幾つかのように引用文献数が200を越えるものもあった。

IV. 結 論

最近になってレビュー論文についての論文がわずかながらも現れるようになってきたが、相変わらず索引誌、抄

録誌、索引作業、抄録作業といった事柄についての論文に比べると十分であるとはとても言えない程度である。又日本の文献はほとんど薬学・医学分野のものであるのも興味深い現象である。

レビューに関するこれらの文献はほとんどその意義であるとか分類であるとか、検索に役立つ二次資料類の説明であるとかの類が多い。分類およびその批評的レビューとしての評価の規準というものは、人によっては非常に細かく行なっている場合もあるが、各々その観点が異なりして、共通の基盤にたつては比較しにくい。結局のところレビュー論文であるか否かを定めるような根本的な場合でも、相当に主観的要素が入り込んでくる。その点では Woodward のように、文献が引用している 'reference' の数を、予めあらかじめ分けるときの目安にするという考えは実際的な考えであると言えよう。しかし彼がその考えを押し進めるための基礎に用いたデータ作成時の選別が厳しすぎたのか、又は臨床家向けのレビュー論文をまぜた場合の医学分野のレビュー論文が他の自然科学分野のレビュー論文に比べて引用文献を余り沢山あげない傾向があるのか、*BMR* に載せられた日本の医学レビュー文献の場合には Woodward の定めた40という数より少い21から30という数のものが最も多く、40以下のものを切り捨てれば半数に近いレビュー論文が失われてしまうことになる。

日本人の著者によるレビュー論文は *BMR* の1974年と1975年の累積版で751論文検索されたが、外国人と共著の場合であるとか、1人の著者による場合は2人以上の日本人の著者による場合に比べて、外国籍の日系人による場合と日本人による場合との区別がしにくい。しかし、相当数の日本人が外国雑誌に投稿しているのも事実であり、その場合にヨーロッパ系の国際的な医学雑誌が比較的多く日本からの投稿者を引き受けている傾向がみられる。日本の医学雑誌に載ったレビュー論文は610論文であるが、このうちわずか9論文が英文の和雑誌にのったものである。従って日本語の読めない利用者には、外国雑誌に投稿されたレビュー論文を合せても、そして日系外国人の論文を含めても、日本語の収録誌に載ったもののわずか1/4にしか達していない論文のみが利用できるだけであることになる。

一方、日本の研究者は、「医学中央雑誌」が約1,400誌も日本の医学関係雑誌を収録しているのに、*Index Medicus* および *BMR* がわずか103誌しか収録していないため、日本のレビュー論文に対して *BMR* を使用して

も、およそ不完全な検索しかできないことになる。しかし、「医学中央雑誌」その他の日本の二次資料では、レビュー論文の重要性についての理解が十分でなく、これを検索するための手段が準備されていない。

そこで不満足ながらレビュー論文を探すことの出来る BMR の範囲でまず検索を行って見るということになる。

実際には、研究者達の中にはレビュー論文が大切であるといっているのかかわらず BMR の存在も知らない人も多い。研究者達の多くが、自分の分野の進歩に遅れずについてゆくためにレビュー論文を使用しているという user study 類の結果を考慮しても、「医学中央雑誌」その他の医学分野の二次資料が、レビュー論文を検索するための手段を準備していないのは大変な間違いであると言えよう。

- 1) *International Conference of Scientific Information, Proceedings*. National Science Foundation/National Research Council. 1959. vol. I. p. 649-51.
- 2) *Science, government, and information*; report of the President's Science Advisory Committee. Washington, D.C., The White House, 1963. p. 27.
- 3) Adams, Scott. "The review literature of medicine," *Bibliography of medical reviews*, vol. 6, 1961, unpagued.
- 4) Papier, Lawrence. Approach to establishing dimention and criteria for evaluation of review publications, <*ISLIC International conference for information science; proceedings*. Tel. Aviv, 1971 > p. 213-31.
- 5) Woodward, A.M., "Review literature, characteristics, sources and output in 1972," *Aslib proceedings*, vol. 26, no. 9, Sep. 1974, p. 367-76.
- 6) Papier, Lawrence, *op. cit.*, p. 214.
- 7) Henderson, Madeline M. "Critical reviews; introductory remarks," *Journal of chemical documentation*, vol. 8, no. 4, Nov. 1968, p. 231.
- 8) Herring, Conyers. "Critical reviews; the user's point of view," *Journal of chemical documentation*, vol. 8, no. 4, Nov. 1968, p. 232-6.
- 9) Bering, Edgar A., Jr. "Critical reviews; the sponsor's point of view," *Journal of chemical documentation*, vol. 8, no. 4, Nov. 1968, p. 236-8.
- 10) Townsend, Leroy B. "Critical reviews; the author's point of view," *Journal of chemical documentation*, vol. 8, no. 4, Nov. 1968, p. 239-41.
- 11) Hart, Harold. "Critical reviews; the editor's point of view," *Journal of chemical documentation*, vol. 8, no. 4, Nov. 1968, p. 241-4.
- 12) Papier, Lawrence, *loc. cit.*
- 13) Cuadra, Carlos A. *et al. Impact study of the Annual Review of Information Science and Technology*. Santa Monica, California, System. Development Corporation, 15 Nov. 1968. p. 121.
- 14) Woodward, A.M., *op. cit.*, p. 367-8.
- 15) Woopward, A.M., *op. cit.*, p. 369-70.
- 16) Brunnins, Dennss A. Review literature and the chemist <*International Conference on Scientific information; Proceedings*. Washington, D.C., National Academy of Sciences, 1958 > Area 3, p. 545-70.
- 17) 広域大量情報の高次処理 総合報告 第V分冊. 昭和51. p. 953-92.
- 18) *Ibid.*, p. 978-82.
- 19) Adams, Scott. *loc. cit.*
- 20) Leitch, Isabella. The place of analytical and critical reviews in any growing biological science and the service they may render to research <*International conference of scientific information; proceedings*. Washington, D.C., National Academy of Sciences, 1958 > Area 3, p. 571-88.
- 21) Virgo, Julie A. "The review article; its characteristics and problems," *Library quarterly*, vol. 41, no. 4, Oct. 1971, p. 275-91.
- 22) 関口昌樹. "Review Journal の意義と重要性," *薬学図書館*, vol. 15, no. 2, Mar. 1970, p. 52-9.
- 23) 金尾素健. "三次資料," *薬学図書館*, vol. 16, no. 3, Jun. 1971, p. 93-9.
- 24) 花田岳美. "基礎化学におけるレビュー雑誌の展望," *情報管理*, vol. 14, no. 8, Nov. 1971, p. 481-4.
- 25) 笹川 統, "Review の探し方," *薬学図書館*, vol. 18, no. 3, Jun. 1973, p. 108-19.
- 26) 青木公男, *et. al.* "医学総説論文の書誌類," *医学図書館*, vol. 21, no. 3, 4, 1974, p. 219-33.
- 27) Woodward, A.M., *op. cit.*, p. 370-3.
- 28) 笹川 統. *op. cit.*, p. 111.
- 29) Virgo, Julie A, *op. cit.*, p. 280-2.
- 30) Fix, C., Campbell, D.T.H. and Creager, W.A. *Some characteristics of the review literature in eight fields of science*. Washington, D.C., Her-ner, 1964. 55 p.
- 31) Woodward, A.M., *op. cit.*, p. 372.
- 32) Woodward, A.M., *op. cit.*, p. 369.